大正期沖縄県下における公共建築の特性

—「琉球」的なる風土との関係—

川　島　智　生

Features of Public Architecture Constructed in Okinawa Prefecture during the Taisho Era

—Relationship between "Ryukyuan" Climate and the Formation of Modern Public Architecture in Okinawa Prefecture—

KAWASHIMA Tomoo

Abstract

I ascertained the following unsolved facts: formation, architectural character and architects of public architecture built in modern Okinawa prefecture. The history of its formation can divide into western-style design and reinforced-concrete design. If so, reinforced-concrete buildings were built in almost same time as those in the mainland, although western-style architectures were formed 20 years later after western-style architectures were built in the mainland. In the early of Meiji period, Japanese-style architecture was introduced in Okinawa prefecture and in the late of the era architecture that was influenced by European-historical style was introduced there. In Taisho period, architecture that was focused on Ryukyu climate was introduced in the prefecture. The reason of this fact is that red roof tiles were used for the architecture. They are traditional in Okinawa prefecture. Architects were Goichi Takeda, William Merrell Vories, who had based their projects in Kansai area.

キーワード：近代建築、公共建築、ヴァナキュラー建築、赤瓦、琉球、風土、鉄筋コンクリート造
Key words: modern architecture, public architecture, vernacular architecture, red roof tile, Ryukyu islands, climate, reinforced concrete

元本学非常勤講師
連絡先：川島智生　〒662-8505　西宮市岡田山4-1　神戸女学院大学文学部総合文化学科
tkawashima57@yahoo.co.jp

序―近代沖縄研究における建築史学に課せられたもの

戦前の那覇市街を撮影した写真からは、家屋の赤瓦屋根、石壁の壁面、庭木の緑色という構図からなる美しい景色が広がっていたことがわかる。それは今ではどこにも見ることができないような希有な景観のひとつだったといえる。このような光景は、沖縄以外の日本のどの都市にもみることのできないものであり、戦前までの沖縄県下の景観のイメージはおそらくはこのような要素に依拠するものではないだろうか。沖縄県の場合は他府県と異なり、明治期以前までの琉球王国という存在にみられるように、独自の歴史を育んできたという背景がある。また亜熱帯性気候のなかで暴風雨に絶えず晒されるという自然風土にあるため、それに耐え得る建築が求められていた。

さて、現在の沖縄はわが国ではもっとも鉄筋コンクリート造建築の割合の高い都道府県であり、「琉球」風建築スタイルを演出した観光用施設を除けば、多くを白い箱状の建造物が占める。つまり、戦前の絵のような景観とはかけ離れたものになっている。

なぜ、このような断絶が生じたのだろうか。沖縄県下は太平洋戦争で戦場となり、建造物の多くが破壊されたことは知られている。戦後は米軍統治下で、公共建築を中心に急速に鉄筋コンクリート造化ならびにコンクリートブロック造化が進展したという経緯があった。1972年の日本復帰後はその進展は加速され、2007年現在では住宅も含め、建設される建造物のほとんどは鉄筋コンクリート造建物となった。

では、戦前期までの赤瓦の伝統的な景観と、戦後の鉄筋コンクリート造の白い箱による景観を繋ぐものは本当になかったのだろうか。時間軸から考えれば、そこには「近代建築」といわれる明治・大正・昭和戦前期に建設された洋風に影響を受けた建築があったはずである。けれども、現存建物がほとんどない現状からは想像することすらできない。むろん近代沖縄県下の建築についてのまとまった論考もない。

その背因として考えられることは、沖縄県下が太平洋戦争で市街地や集落が戦場となり、ほとんどの建物が消滅し、戦前までに建設されていた近代建築もまた、ほんの一部の鉄筋コンクリート造建造物を除いては皆失われたことがある。木造系の建物は焼失し、頑強さを誇った鉄筋コンクリート造建造物にしても、屋根やスラブ（床などの水平の板状のもの）は失われ、銃弾で穴を穿たれつつも、辛うじて壁一枚が残っていたものが多かった。戦後それらの建物は修復して使用されるものの、本土復帰までに現存していた建物は僅かであって、そのことも作用して、近代建築が県下に存在したという記憶すら伝えられることは少なかった。

その結果、いわゆる「近代建築」の認識が欠け落ちることになった。

けれども、戦前期までの写真や新聞、各施設の沿革史などを精緻に検証していけば、各ビルディングタイプごとに一定の数の近代建築が建設されていたことが判明する。また、近年近代建築史の研究が進み、建築家の作品一覧のなかに沖縄県下の建築が見出せるケースも増えたことも関連する。ただし戦前期までは地元の民間資本が育たなかったことで、近代建築の過半は

学校や官公庁などの公共建築にとどまった。

筆者は近年、大正６（1917）年前後の時期に建設された那覇区役所ならびに首里工業徒弟学校、沖縄中央教会といった公共的な建築のなかに、伝統的な赤瓦を含めた「琉球」という要素を建築的文脈に織り込んでいこうとした痕跡を見出した。建築の造形面にとどまらずに、それを裏付ける設計者の理念ともいうべき史料も得られた。そこでは沖縄県の風土の特性に配慮したスタイルが近代的な建築のなかに現れ出ており、「本土復帰」以降の昭和五十年代から次々と沖縄県下で出現した風土性を意識したヴァナキュラー建築の、いわば先駆けといえる。この３建築に共通するスタイルは、赤瓦で葺かれた屋根を持つ点にあって、この手法は昭和戦前期に鉄筋コンクリート造の躯体ながらも赤瓦葺き屋根を有した県立第１中学校をはじめ、県立第３中学校や郡部町村立の複数の小学校などに繋がっていった。昭和17（1942）年の那覇ホテルも木造ながらもそのような延長線上に位置付けられる。さらに、この３建築のひとつ、那覇区役所は、わが国で最初のスパニッシュ・ミッションの建築スタイルであることが発見され、建築史学の見地からも重要な意義がある。またもうひとつのもの、那覇バプティスト教会は設計の際に「琉洋折衷」という琉球と西洋を併用したコンセプトが提示されていた。

このような、沖縄という場所性を重視し、その土地にふさわしい建築を求めるという理念は、現在も依然として、「沖縄建築」の中心的な課題であると考えられる。そのような意味において、本研究はその原点を探り、なおかつ空白状態になっている沖縄の近代建築史を埋めるものとして重要な意義があるものと考えている。現時点で現存する近代建築は、大正14（1925）年に竣工した旧大宜野村役場の建築が知られるばかりである。沖縄県全体の近代建築についての研究は今後の課題としたい。また、近代において沖縄の民家や景観が他府県の知識人たちによって発見されていく過程については、別稿で予定している。

１章．近代沖縄県の建築様態

１節．沖縄県の近代建築史概観

建築史の観点からは未発掘といえる沖縄の近代における建築を捉える時に、手掛かりになるものは、日本における近代建築史の分類である。日本における近代建築史の時代区分[1]をみると、第１は幕末の安政６（1859）年より明治18年（1885）頃まではお雇い外国人建築技師と大工棟梁による見よう見まねの擬洋風建築の時代、第２は明治19（1886）年より明治44（1901）年までで、日本人建築家による煉瓦造や木造の本格的洋風建築の時代、第３は大正元（1912）年より大正11（1921）年までの９年間という短い時期だったが、鉄骨ならびに鉄筋コンクリート造が開始される時代、第４は大正12（1923）年より昭和19（1944）年までの時代で、耐震構造理論にもとづく耐震耐火半永久の鉄骨ならびに鉄筋コンクリート造の時代、とおよそ４つの時期に分けられる。

この時代区分をもとに、沖縄県での建築様態を写真や図面などから分析をおこなう。

第１期は県庁舎や裁判所など和風意匠の建築であり、全体として洋風はほとんど出現をみない[2]時期だった。他府県のような擬洋風の建築がつくられなかったことに、この時期の最大の特徴がある。明治21（1888）年までに、約2,000人の「内地人」が外来者として入り込み、「利

写真１　明治期の県庁舎

のある仕事は総て内地人の手に入り」[3]、その結果「表通りは内地人の商店」に変わっていく。このようにこの時期は那覇を中心にいわゆる「日本家屋」化が進展していくという様相をみせる。明治22（1889）年には民家の瓦葺制限令[4]が解除されていた。

第２期には沖縄で初期の洋風建築が立ち上がる時期で、その嚆矢は明治27（1897）年の南陽館[5]だった。以降師範学校などの公共建築を中心に木造による簡素な洋風建築が現れる。いずれも簡素な木造の洋風建築だった。明治40（1907）年には煉瓦造本格的建築の第百四十七銀行が、明治44（1911）年には木造ながらもモダンデザインの那覇郵便局が完成していた。

第３期は公共建築の整備期にあり、ようやく他府県なみのレベルを有した建築が新築される。大正８（1919）年の鉄筋コンクリート造の那覇区庁舎や大正９（1920）年の木造本格洋館の県庁舎がある。

第４期は鉄筋コンクリート造化が本格化し、モダニズム建築も出現する。大正14（1925）年には金武小学校や大宜味村役場が本格的な鉄筋コンクリート造で完成し、以降小学校や旧制中学校が次々と鉄筋コンクリート造となる。そのなかで赤瓦屋根の鉄筋コンクリート造建築も第１中学校などで実現する。

このような沖縄の建築の変遷を日本のものと比較すれば、第２期の建築はおよそ10年前後の遅れがあったものの、第３期の時点ではほぼ追いついている。第４期の時期ではモダンデザインのものがきわめて少なかったということが指摘できる。その代わりに第３期の建築で、沖縄の風土を意識した建築スタイルが出現していた。このことは特筆すべき内容であり、本研究の中心的な主題であり、次章で詳述する。

このような時間軸に沿った枠組みとは別に、筆者は建築の近代化の重要な指標として、洋風化ならびに、鉄筋コンクリート造化の２点を設定し、その出発点ならびに成立の過程を沖縄県下の建造物を対象に検証した。前者が明治期、後者が大正期という図式が日本の近代建築の通史にはあるが、沖縄県ではこのふたつの要素が時間的に近接した時期に現れたという特徴が見出せた。それは次節でみる沖縄県の地方自治制度が関連する。

全体を通して概観すれば、明治30年代以降はわが国の近代建築史の変遷と歩を同一とする。

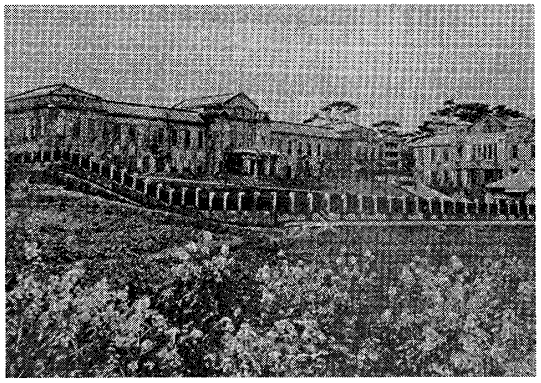

写真２　大正期の県庁舎

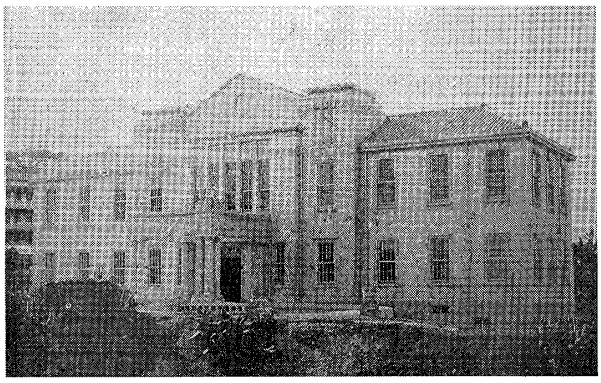

写真３　大正期の県会議事堂

２節．地方自治制度との関係

琉球新報社のジャーナリスト・太田朝敷[6]が昭和７（1932）年に記した『沖縄県政五十年』[7]によれば、沖縄県の歴史は、地方制度上から４つの時代に分かれると論じた。第１期が明治12（1879）年から明治28（1895）年、すなわち琉球処分から日清戦争までの間で「事勿れ主義」の時代で「何もかも旧制旧慣を踏襲し、新しく感じられたものは、裁判と警察くらい」であり、第２期は日清戦争以降の明治29（1896）年から明治41（1907）年で「日本」化が進展した時代で、第３期は県会が開設された明治42（1908）年から大正８（1919）年で自治の準備期間、第４期が大正９（1910）年以降で、「日本本土」の他府県並みの自治が獲得できた時代である。

先にみた沖縄県の建築様態を太田朝敷による時代区分と照合してみると、第１期はほとんどみるべき建物が現れなかった。第２期は木造洋風建築の出現、第３期は煉瓦造洋風建築の誕生、第４期は県庁舎などの本格的な官庁建築の完成、ということが判明する。

日本の近代建築史と比較して、このような違いを生じさせた背景には、沖縄県特有の地方制度による事情があった。沖縄県は大正９（1920）年までは特別県制ならびに特別町村制という他府県とは異なった地方制度下にあった。つまり完全な自治制が布かれていた訳ではなく、明治23（1890）年に公布されていたわが国での府県制からは、30年の遅れが生じていた。また明治27（1894）年の日清戦争までは明治政府による旧慣温存政策が採られたために、他府県でみられた明治維新以降の数々の変革は明治29（1896）年以降に持ち越されることになり、その分近代化に停滞が生じ、そのことは社会生活の器である建築物により強く反映されることになる。近代以前の琉球王国時代の建築様態は、一般の住宅は日本建築の様式で、公共建築は中国式という沖縄の特殊事情があったことも指摘しておく。

２章．区役所の建築

公共建築とは民間建築とは異なり、使い勝手が良いという機能面にとどまらず、完成した建造物という実物でもって、今後の建築的な範を広く市民に示すという目的がある。したがって、本来はそこに崇高な建築理念が込められる必要があった。けれども、あらゆる公共建築においてそのような構図が適応される訳ではなかった。時代の変わり目において、新しいビルディングタイプ（建築類型）が誕生する際に限って、立ち現れる現象である。しかも、該当するのは、

そのなかのほんの一部の建築に過ぎない。しかしそこに出現した建築は、外観デザインや間取り、内部空間、構造、設備といった諸々の要素から評価され、突出し優れたものは、その後のモデルとなっていく。つまり歴史的にみて、建築的な価値はその建物が時代を引っ張っていくモデルと成り得たかどうかと言うことにある。

1節．那覇区役所

1）竣工の時期と建築構造

大正9（1920）年1月に、建築系月刊誌『建築世界』[8]第十四巻第一号の口絵に「沖縄県那覇区役所新築庁舎」一枚の写真が載る。瓦屋根にアーチの開口部の連なる壁、塔屋が聳えるという一見官公庁らしくない建築である。沖縄県下で最初に建設された鉄筋コンクリート造建造物だった。だが、戦争で焼失し、焼け残った箇所も早い時期に解体されたために、詳細は明らかではない。また竣工時のことを記した史料類[9]が見出せていない。このようななかで、戦後にこの建築について記されたデーターの多くは正確さに欠き、再検証する必要があると思われる。

まず、那覇市側の資料[10]によれば、大正6（1917）年10月に完成していたとある。が、この竣工年にはもう一説あり、設計した武田五一の『武田博士作品集』[11]によれば、大正8（1919）年3月に竣工とある。この建物の竣工時のことを記した詳細な史料類[12]に欠ける。ただ大正7（1918）年2月2日の『琉球新報』によれば、「区役所改築は大正6年度より大正7年度に至る2ヶ年継続事業」とあり、「大正6年度支出は6,750円、大正7年度支出は21,632円50銭」とい

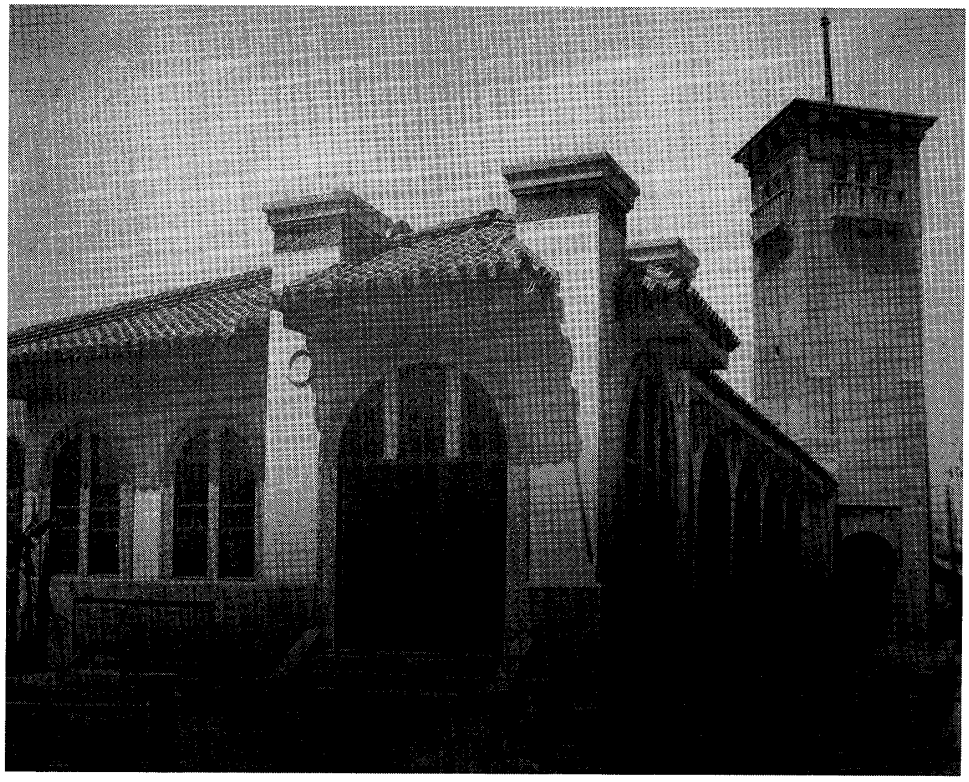

写真4　那覇区役所竣工

う予算配分が記されており、このことからは、大正７年度に完成したものと判断できる。つまり『武田博士作品集』の大正８（1919）年３月竣工説がより真実味を帯びて浮上してくる。那覇市側の公式発表の大正６（1917）年10月竣工説は、大正６（1917）年10月１日の『琉球新報』記事「那覇区役所移転期」中の「東町に建築中の仮区役所は近日中に竣工するを以て本月中旬頃移転」という記載から間違いであることが判明する。おそらく「移転」が「仮区役所」の竣工と取り違えられた可能性が高い。前述の予算からみても、大正６（1917）年中には完成していないことは明確である。

では着工はいつ頃だったのだろうか。上述の『琉球新報』記事「那覇区役所移転期」から逆算すれば、大正６（1917）年11月には取りかかられたものと考えることができる。工期については、大正７（1918）年２月３日の『琉球新報』記事「区役所改築費」の中に、15ヶ月間の主任技師の給料が経費として計上されていたことから、約15ヶ月間が想定されていたことがわかる。つまり、竣工予定は大正８（1919）年１月の下旬か２月の初旬ということになる。大工事には遅滞が付きものであることを考えれば、１ヶ月ほど遅れた『武田博士作品集』の大正８（1919）年３月竣工が妥当なものであると判断できる。だとすれば、雑誌『建築世界』への掲載が、竣工後一年以内であったこととなり、新築建造物の紹介という点で一般的なものと解釈ができる。

建物の構造が鉄筋コンクリート造だった根拠は、『武田博士作品集』のなかの記述による。これまで、沖縄の近代建築史では、大正14（1925）年に竣工した大宜見村役場[13]が最古の鉄筋コンクリート造建造物とされていたが、この記述の『鉄筋コンクリート造平屋建』という内容が正確なものであるとすれば、那覇区役所がもっとも早いものだといえる。この建物は塔屋棟と平屋棟の本館の２棟からなり、塔屋は外観からもあきらかに鉄筋コンクリート造だが、平屋棟は赤瓦葺の屋根が採用されており、鉄筋コンクリート造とも木造とも外観からだけでは判断が付かない。すなわち平屋建の本館を敢えて工費の高額な鉄筋コンクリート造にする根拠がみえてこない。また、『武田博士作品集』にある昭和５（1930）年に竣工の広島県下の福山市役所をみると、鉄筋コンクリート造と記されてあるが、実際には木造であった[14]ことが判明している。このようなことから平屋棟が鉄筋コンクリート造であったという確証はとれない。

次に坪当たりの金額から、建物の構造を検証する。前述の新聞記事「区役所改築費」には、次のような工費の内訳が記される。庁舎正面大玄関[15] 7,350円、本館建物建坪173坪16,783円50銭、附属建物788円、便所210円、防火貯水池260円、飲料水槽250円、そのほかに計上されたものに主任技師、技術員、顧問技師などの人件費が含まれ、総額28,382円50銭だった。ここからは本館は坪当たり約97円となる。大正前期の日本では第一次世界大戦による未曾有の好況に伴い物価の急上昇があって、建設の坪単価から構造の特定は容易くはないが、大正４（1915）年に完成した鉄筋コンクリート造による東京商科大学研究室棟の建設事例[16]を検討すると、二階建で延826坪あり、民間請負会社の施工で24,000円の工費だった。すなわち坪約96円で完成しており、数字からみると那覇区役所本館とほぼ同額であった。ただし那覇区役所は着工がその二年後であり、その間に大きく建設費の高騰があったために同列に捉えられない。だが、那覇区役所では民間の請負業者による施工ではなく、直営工事であったために、建設コストとして

は低廉に済んだものと考えられる。

さらに坪当たりの金額を比較するために、区役所とほぼ同時期に隣り合って建設された議事堂の建築費をみる。その金額は大正７（1918）年２月３日の『琉球新報』記事「議事堂建築費」に記され、本館建物建坪163坪20,049円、廊下284円85銭、そのほかに主任技師、技術員、顧問技師などの人件費が含まれ、総額21,663円85銭となる。ここからは議事堂は坪当たり約123円となる。ただし議事堂の内部はギャラリーの付いた吹抜のホールとなり、二階部分はわずかな面積を占めるにすぎない。が、構造的には２階建となり、建設費もほぼ２階建に近い金額がかかったものと考えられるために、延建坪を倍にして計算すると、坪当たり約62円となる。木造の議事堂の62円と区役所の97円と比較すれば、約1.5倍の差が付く。大正期の鉄筋コンクリート造と木造の建設費の違いは約1.5～２倍あって、そのような坪単価の差異からは鉄筋コンクリート造だった可能性はある。ただしここでの構造としては、壁や柱という垂直材だけが鉄筋コンクリート造で、屋根スラブはつくられずに、木造の小屋組が架けられていたものと見られる。つまり屋根スラブがなければ、可能な金額だったといえる。

工期について検討する。先述の『琉球新報』記事「区役所改築費」ならびに「議事堂改築費」によれば、議事堂の工期が８ヶ月間に対して、区役所には15ヶ月間がかけられており、このような長期間の工期を考えれば、鉄筋コンクリート造だった可能性はある。

なお、ここで用いた行政単位の「区」について記すと、沖縄県ではこの時期、市町村制が施行されず、「市」に代わるものとして「区」があり、県下では那覇と首里が該当した。明治29（1896）年から大正10（1921）年まで施行されていた。

この建物はその後25年間、この場所に建ち続け、昭和19（1944）年10月10日の空襲によって、焼失する。鉄筋コンクリート造という不燃構造ゆえに、躯体は焼失しなかったものと考えられるが、詳細な史料に欠ける。ただ空襲後に撮られた焼け野原の中に塔が聳える写真があり、瓦解はしていなかったことがわかる。戦後の区画整理によって取り壊された。

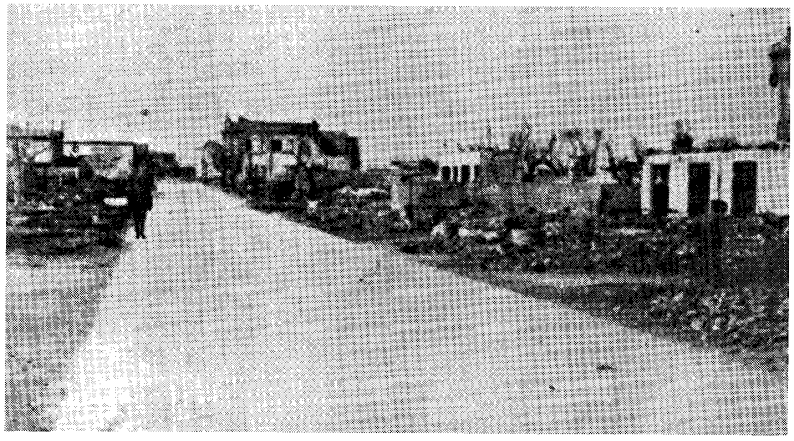

写真５　焼け残った塔
（右端の上部）

写真６　当間重慎・顔写真

２）当間重慎区長のもとでの成立

どのような経緯で、新しい区役所が建設されることになったのだろうか。区役所新築とは区の事業ゆえに、当時の那覇区長、当間重慎[17]の意向が大きく作用したものと考えられる。当間重慎の人物像をみる必要がある。

当間重慎は那覇という都市に対して、計画的な視点をもって都市施設の整備をおこなった最初の区長であり、市長だった。在任期間としては大正２（1913）年から大正12（1923）年までの10年間だった。その間、大正10（1921）年５月20日以降は一般市制施行に伴い、那覇市となる。那覇区長ならびに那覇市長としての業績は、「市庁舎、市営浴場をつくり、町名変更をおこない、東町大火後に区画整理を施し、壺屋の陶器や若狭町の漆器、織物のために留学生を本土へ派遣し、水道計画、ガス計画を試みた」[18]というものだった。また息子である当間重剛[19]によれば、父.当間重慎が区長に選ばれた理由として、区会議員時代に那覇区による公有水面埋立問題でリーダーシップを発揮したからだという。それは明治43（1910）年のことで、那覇区と沖縄県が埋立事業をめぐっての対立する。那覇区は道路や港湾整備を伴った海岸埋立計画[20]を立て、その収益で市場や協同物揚場、公会堂などの建設をおこなうことを予定するものの、沖縄県によって妨害される。このような都市整備は区長になってからの施策と関連する。

当間重慎は「那覇区の将来」という論文をみずからが創刊した『沖縄毎日新聞』社説に記すなど、積極的に都市整備に着手していた。それまで那覇を仕切っていた首里閥族と寄留商人に対抗して、那覇という地域独自のアイデンティティの確立を目指した。その方策のひとつが那

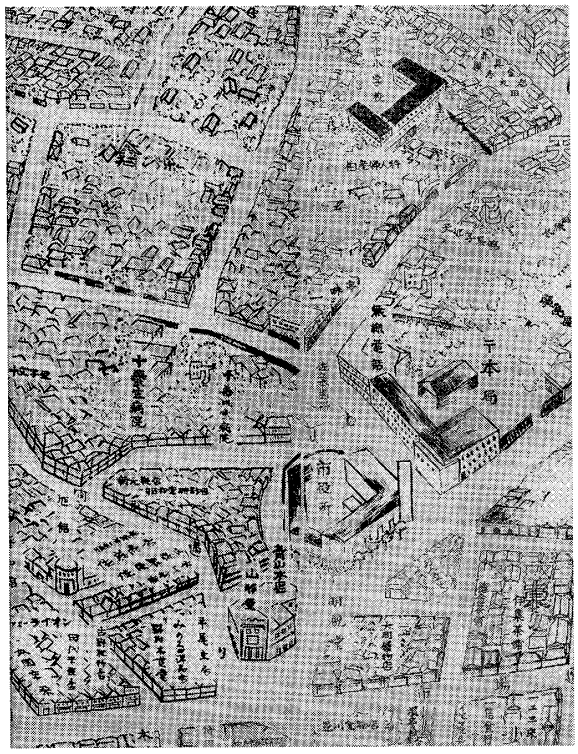

図１　那覇市街地図

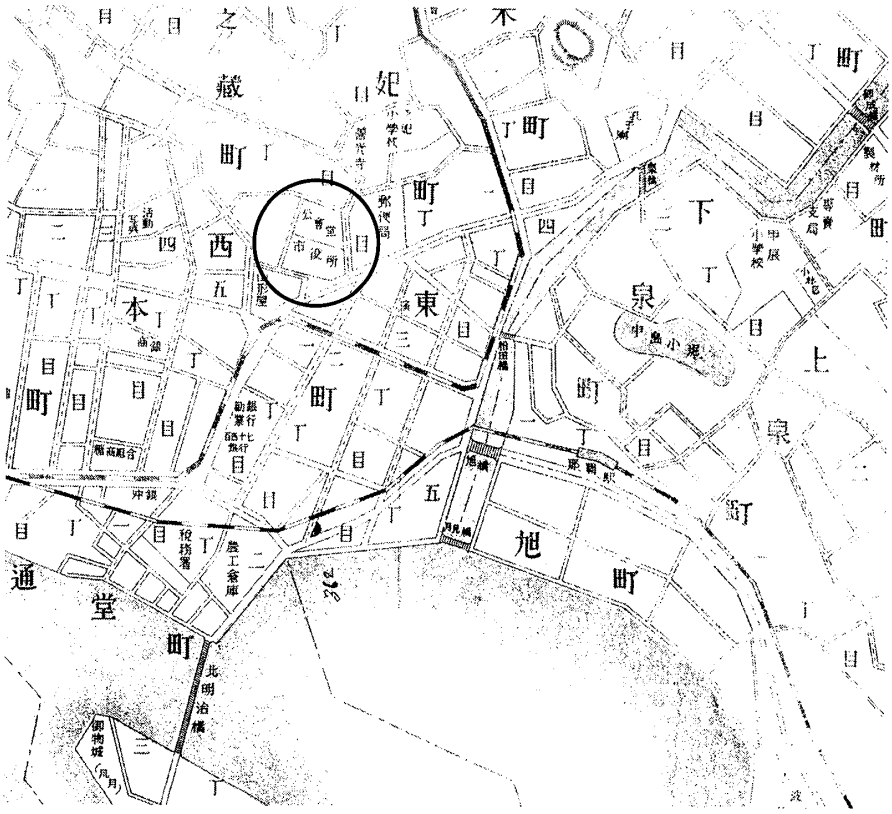

図２　区役所の位置図
（○で囲った場所）

覇の都市改良であって、大正３（1914）年の東町大火災を契機に、市区改正事業計画[21]が立てられていた。県庁所在地とはいえ、小都市だった那覇でそのような計画がなされていたことからは、当間重慎が他府県の都市経営の動向をリアルタイムで熟知していたことが判る。沖縄毎日新聞を創刊したジャーナリストならではの時代感覚によるものだろう。このような人物が那覇区役所の最高責任者だったからこそ、建築的に画期的な区役所が誕生することに繋がったと考えられる。

大正期自治体経営という観点では、わが国でもっとも先進的な都市．大阪市の事例[22]にみられるように、一般的に市区改正事業は市庁舎をはじめ議事堂や公会堂などの公館の建設を伴った。那覇でも未完に終わった市区改正事業の直後に区役所建設がなされており、この建設事業がこのような都市改造の一環のなかで生まれてきたものだと捉えることができる。そのような都市改造を、建築や土木といった都市工学的な側面から支えたのが、後述する秦泰親という技術者だった。

３）建設経緯

大正５（1916）年暮に、那覇区役所の改築計画が現れる。大正10（1921）年５月20日より、他府県なみの一般市制が施行されることを鑑み、そのことを見越してあらかじめ改築がなされることになっただろうか。実際に特別区廃止が議論されたのが大正６（1917）年12月だったことから、直接の因果関係はないものと考えられる。だが、大正７（1918）年４月30日[23]には知事も市制施行に動き始めていた。

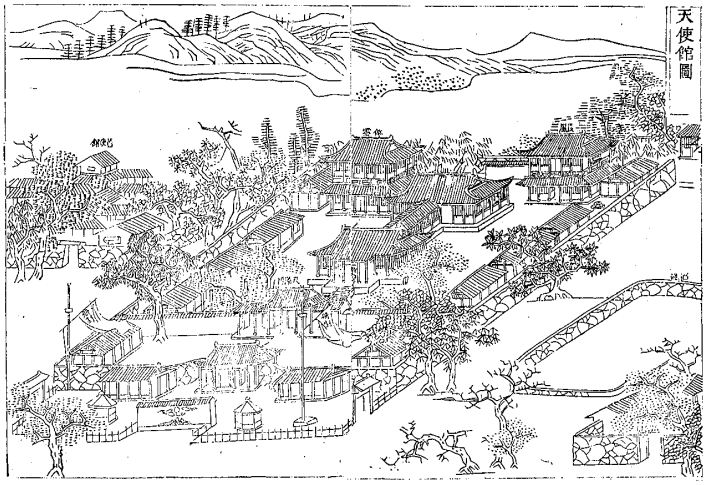

図3　天使館配置図

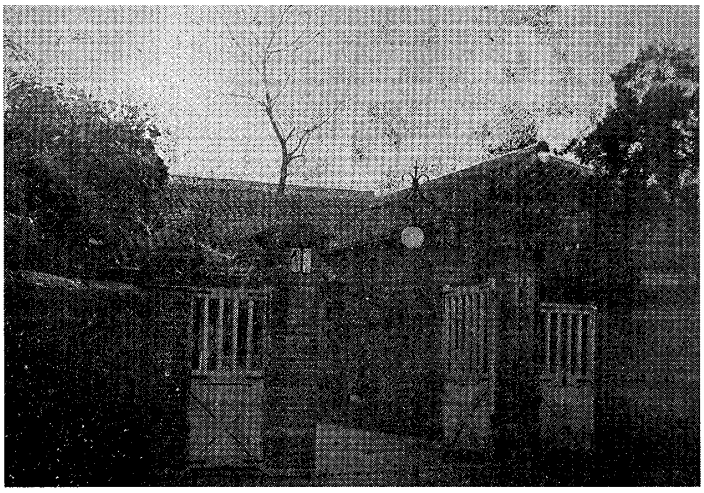

写真7　旧那覇区役所

大正5（1916）年12月26日に、区役所の改築ならびに区会議事堂の新築について、その経費と敷地について議員評議会で協議[24]が始まる。天妃小学校の敷地へ移転が論じられるものの、元の場所が「人民の便利、市街の美観上」からは「甚だ適当なる場所」ということで、現在の敷地に改築されることになる。

この時点での区役所建設費は23,000円、公会堂は21,000円とある。大正6（1917）年1月11日の『琉球新報』によれば、「日本式の平屋造り」と想定されており、議事堂と合わせて、約33,000円だった。ところが、2日後の大正6年1月13日の『琉球新報』記事によれば、区役所は二階建てのルネッサンス式で、経費は20,000円、坪数は160坪と変更する。同年の6月から7月に着工が予定されていた。公会堂は17,000円で、「ルネッサンス式の平屋」で、「屋内周囲に階上を造る」ものとされた。すなわち中央部は吹き抜けで、周囲にギャラリーが廻った空間が目されていた。その建築面積は133坪だった。3日後の1月16日には区役所は坪130円、議事堂は坪120円と仲浜助役は説明したものの、那覇区評議会で議論があり、決定したのは区役所が200坪の面積で、坪100円で計2万円、公会堂は144坪の面積で、坪120円で、計1万7千余円

となった。公会堂の建築は鉄材を使用することで、金額は当初のままだった。ところが、半年経過しても、着工はなされずに宙に浮いた状態になる。

4）建築意匠「トロピカル、スパンシユシシヨン、スタイル」の正体

大正6（1917）年6月30日の『琉球新報』によれば、「那覇区役所及議事堂は始めルネサンス式なりしが武田博士の意見参考し、トロピカル、スパンシユシシヨン、スタイルに日本趣味を加味したるものに変更せる」[25]とある。

ここに至って、官立京都高等工芸学校教授．武田五一が突然に登場することになる。実際にこの時期に武田五一が来島したかどうかは定かではないが、大正6（1917）年12月28日の臨時那覇区会では、「区役所新築設計の爲め武田博士歓迎に要する費用」[26]として、100円の追加予算が計上されていた。

この建築様式について武田五一は「亜熱帯の建築に適し」とし、「区長室の上に高さ60尺の塔を築き那覇市を瞰下し得べく時々警報を為すべし」と説明していた。建築スタイルは変転し、最初は日本式の平屋造り、2日後にルネッサンス式の2階建て、半年後にスパニッシュ・ミッション・スタイルとなった。

では、武田五一が主張した「トロピカル、スパンシユシシヨン」とはいったいどういう建築スタイルだったのか。「スパニッシュ・ミッション」という聞き慣れない発音におそらくは新聞記者が誤記したものと判断されよう。

武田五一は三年前の大正3（1914）年の太平洋パナマ博覧会に日本政府館の設計主任として訪米する。その際に米国西海岸で当時流行していたスパニッシュ・ミッションという建築スタイルに出逢う。それはこの博覧会会場に用いられていた建築スタイルのひとつだった。そのスタイルは南欧のスタイルでありながらも、造形面で東洋に繋がっていくという要素があった。赤い瓦・白い壁・アーケード・簡素な造形というのが、本来のスパニッシュ・ミッションの特徴だったが、日本家屋の屋根形状や勾配、日本の本瓦の形、日本の行基葺[27]という屋根瓦の葺き方、日本の白壁の土蔵、といった要素[28]に似通った部位を有した。つまり、日本の建築に融合させるのに最もふさわしい洋風スタイルとして捉えられていたものと推測される。大正期、武田五一は今後の日本建築に和風と洋風を融合させた意匠を考えており、その手掛かりをここで得たものと判断できる。

那覇区役所設計の際に、「日本趣味を加味したるもの」とは、ここで述べた、スパニッシュ・ミッションと日本の意匠の融合に他ならない。

武田五一の太平洋パナマ博覧会報告[29]によれば、「伊太利は半熱帯国でカリホルニアの桑港の気候と似たものでありますから、其桑港の気候に応じて羅典系統、伊太利で出来た形式を博覧会の様式に採った」とある。那覇区役所設計の際に、「トロピカル」という言葉がスパニッシュ・ミッションの前に付いていた理由はここに求められる。「トロピカル」の意味は「熱帯」だが、武田五一の言いたかったことは、沖縄は亜熱帯だから、亜熱帯気候特有のスパニッシュ・ミッションというスタイルこそがふさわしいということだったのだろう。亜熱帯の沖縄の気候が「半熱帯」の桑港（サンフランシスコ）の気候と重ねられることで、このスタイルは

誕生した。見方を変えれば、沖縄県という亜熱帯の風土に触発されて、生まれたスタイルともいえる。

日本では沖縄に出発点が求められるスパニッシュ・ミッション・スタイルは数年後の大正10年代以降、関西を中心に全国に成立していく。武田五一が関西を拠点に設計活動をおこなっていたことも理由のひとつだが、武田五一以外にも古塚正治や渡辺節、ヴォーリズ、武田五一の弟子の松本儀八の率いた大林組設計部など多くの建築家がこのスタイルで主に邸宅建築を完成させていった。戦前期までの日本人にもっとも好まれた洋風意匠だったといえる。

なおこのような気候や風土に依拠して、スパニッシュ・ミッション・スタイルが採択された事例はこの時期ほかにもあって、幻に終わった大正11（1922）年の神戸女学院大学部のキャンパス[30]もそのひとつである。外国人建築家マーフィは明石の大蔵谷という瀬戸内海を望む土地ということで、瀬戸内海を地中海と見立て、スパニッシュ・ミッション・スタイルが採用されることになった。すなわち、建築が建てられる風土性こそが、建築様式の選択の際に、主な理由になっていた。

5）配置手法

敷地の様相をみる。天使館があったこの一街区には、東側にL型に区役所が配される。その玄関は南端にあったが、その2棟が交差する最東部が「庁舎正面大玄関」だった。その上に塔屋が設けられ、街路に向かって突出したかのようにみえる配置手法が採られていた。おそらくは一階から上に昇る階段が塔屋にむかって設けられており、その部分だけが区役所の建物と合体していたのだろう。北側には区議事堂兼公会堂が区役所と同時期に完成していた。西側には

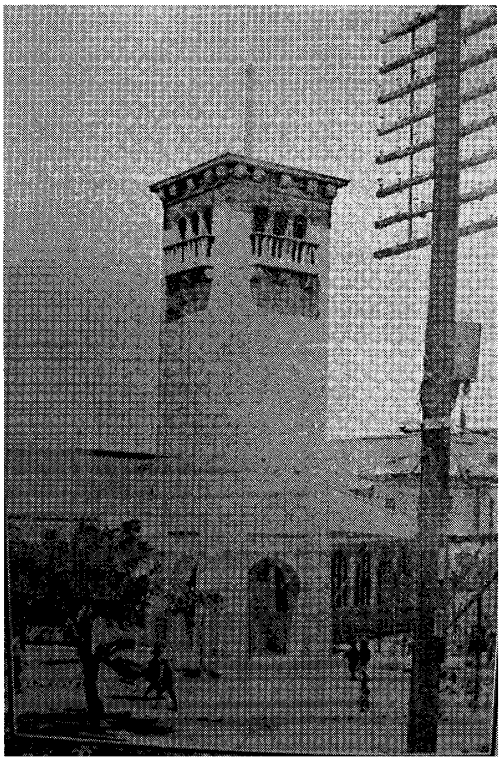

写真8　那覇区役所塔

平屋建の精神病棟[31]があり、これらの３つの建物で囲まれた内側は中庭になっていた。すなわち、この一画はシビックセンターを形成していた。

区役所の建物は平屋建の事務所棟と４層から５層と思われる塔屋部分からなる。なぜ、このような形態になったのか。前述の武田五一の言によれば、「区長室の上に高さ60尺の塔を築き那覇市を瞰下し得べく時々警報を為すべし」[32]とある。最上階で時報を告げる鐘が鳴らされることになる。またその高さを考えれば、火の見櫓の機能も求められていたのかも知れない。実際に那覇市街で最高高さを誇る建物であり、那覇第一の目抜き通り・大門前通りのアイストップ[33]となり、戦前期までの那覇の原風景を形成していた。

このような庁舎と塔屋からなる構成は、それまでの町村役場のありようとは大きな違いを示した。いったいどこにそのモデルを求めることができるのか。

おそらくはヨーロッパの小都市の市庁舎がモデルにあったものと考えられる。市役所と塔屋の関係は1942年のデンマーク・オーフス市庁舎の建築設計に端的にうかがえよう。設計をおこなったデンマークの建築家．アルネ・ヤコブセン[34]の塔のない設計案は市当局からは認められず、市当局はモニュメンタルなタワーをつくることを求め、結果として塔が設置された。塔はある意味では権威の象徴ともみなされていた。このように20世紀前半までは一般的に市役所の建物に塔は付きものだった。

さらに古い時代に遡れば、イタリアでは聖堂と離れて鐘塔を設ける様態がみられ、代表的なものにフィレンツェ大聖堂のジョットの塔やヴェローナのサン・ゼノン、ピサの斜塔などがある。鐘塔はカンパニーレ[35]とよばれ、このような形式がヨーロッパ各地の市庁舎へと繋がっていったものと考えられる。より詳細に検証すれば、那覇区役所では建物に鐘塔部分はわずかながら接続しており、正確に言えばベルフリー[36]と呼ばれる形式となる。

またイタリアのマントヴァの中心地にはパラツィオ・デ・ラジョーネ[37]という会堂建物があり、歩廊（アーケード）の連なる先にはアイストップとして塔（クロックタワー）が設けられ、時報を知らせる。塔の前面は広場となる。那覇区役所でも塔の前面ならびに左右は街路になっており、おそらくは街路と一体利用することが想定された可能性がある。そのような意味で外部に開かれた公共空間の先駆けとして捉えることもできる。

写真９　大門前通と区役所塔

写真10　マントヴァの広場

那覇区役所が完成して７年後の大正15（1926）年から昭和５（1930）年にかけて、武田五一は生誕地である広島県福山市において、市庁舎・市会議事堂・市公会堂の３棟をひとつながりの敷地に設計しており、その間に広場を取り込む考え[38]など、那覇区役所で試行した考えがより発展した形で表れていた。

６）建物の分析

竣工当時の設計図は現時点では見出せていないが、外観の建築スタイルは複数の写真から読み取れる。

事務所棟からみる。事務所のプラン[39]については道路側に廊下があり、カウンター越しに内庭側が事務所になっていたという証言が得られている。寄棟の形で軒の出が深い屋根は、沖縄特有の素焼きの赤瓦で葺かれ、白い漆喰でとめられていた。つまり、沖縄地方特有のヴァナキュラーな素材である赤瓦が用いられていた。スパニッシュ・ミッション・スタイルであれば、スパニッシュ瓦が用いられるはずである。このことからは単にこのスタイルの模倣ではないことがわかる。武田五一のいう「日本趣味の加味」とはこのことを指している可能性もある。

外壁は白い漆喰塗りとなり、正面玄関側には入口の他に、二連のアーチ窓が並ぶ。塔屋側、すなわち側面には六連のアーチ窓がみえる。仕様書が見出せていないために、正確な建築材料は特定できないが、前述の『建築世界』口絵写真の解析からは次のように判断できる。開口部廻の額縁は洗い出し仕上げ、土台部分と一体化した腰壁は擬石塗り仕上げとなる。また玄関ホールの三方の出隅柱ならびに外壁開口部の間の柱部分に、アーチ開口部の頂部の高さで輪状の装飾物が配されていた。イタリア・ルネッサンスの建築でしばしばみられる意匠である。

玄関ホールの三方の出隅柱は屋根の軒のラインを断ち切り、上方にさらに立ち上がる。このような手法はスパニッシュ・ミッション・スタイルではなく、この時期ヨーロッパを席巻していたセセッション・スタイルで用いられたものであった。明治31（1898）年にウィーンに完成した建築家オルブリッヒが設計した分離派館[40]の形態を髣髴させる。分離派館は屋根の形態が、イスラム寺院に触発された建築スタイルだった。だとすれば、那覇区役所玄関の３本の柱と屋根の交差した形状もまた、デザインソースとしてはイスラムの建築意匠に行き着くものと考え

られる。このような柱型を傾斜屋根の上部に突出させる手法は、東京にあった川崎別邸[41]の屋上ペントハウスでも見られる。川崎別邸は建築科・三橋四郎[42]の設計によって大正５（1916）年に竣工していることを考えれば、大正一桁代に流行した造形手法のひとつであったと捉えることができる。三橋四郎はセセッションのスタイルを早い時期に採り入れた民間建築家だった。

この３本の柱の柱頭は無装飾で水平に断ち切られる形状をとるが、その下には軒蛇腹が廻り、さらにその下の部分は粗く塗られたスタッコの帯が取り付くことで、デザインがなされていた。当時としてはきわめて簡素な意匠である。このような建築スタイルの採択は、武田五一が明治35（1902）年に欧州に留学し、アールヌーボーやセセッションの建築スタイルをいち早くわが国に導入した建築家であったことを考えれば、理解される。

軒下には換気口がみえる。このことからは、屋根は木造の小屋組によるものだったと判断できる。この時期、わが国は鉄筋コンクリート造の黎明期にあって、その事例は少ないが、武田五一は明治43（1910）年に竣工する京都商品陳列所で「我国最初の鉄筋混凝土造建築物」[43]を手掛けており、この新しい構造法に関心を示しており、ここで試みられたとしても不思議はない。

このように、事務所棟はスパニッシュ・ミッション・スタイルといいながらも、セセッション的な要素や赤瓦に代表されるようなヴァナキュラーな側面も持ち合わせていた。

次に塔屋をみる。前述したように教会の鐘塔がモデルとなっている。一階部分は通り抜けの出来る吹き放たれた空間になっており、出入口にもなっていた。最上階は四面ともに三連アーチの開口部が穿たれ、壁面より突出した小ベランダが付くという構成をみせる。屋上屋根部分は軒が張り出しており、一面あたりの５つの持送りが支える。四方に設置されたベランダは３つの持送りが取り付く。持送りの素材が鉄筋コンクリートか木によるものかは定かではないが、四分の一円の形状はヨーロッパの意匠というよりも、東洋の意匠の影響が見受けられる。このことが「日本趣味の加味」を表しているのかも知れない。唯一、この最上階にのみ装飾的な要素がみられたが、あきらかに見られることが意識されていたものと判断できる。

塔屋の足元に目を転じれば、出隅部分にはテーパー（勾配）の付いたバットレス（支え柱）が付加されており、意匠的にも安定感を与える。しかもバットレス部分は水平目地に縦目地が所々に入り、組積造を思わせる外観意匠となる。この目地は一階のアーチ部分にも入れられている。塔の外壁全般については水平目地が出隅部分を中心に観察できるが、どのような仕上げがなされていたかは定かではない。

施工は直営だった。沖縄県最初の鉄筋コンクリート造でもあり、それに対応する技術力を持った建築請負者が沖縄県下には存在しなかったことを示している。

７）設計体制ならびに土木技師秦泰親

この建物の写真が掲載された『建築世界』第十四巻第一号によれば、設計は秦泰親（はたやすちか）[44]、工学博士武田五一顧問とある。前述の『武田五一作品集』によれば、武田五一が設計したとある。秦泰親とはどういう建築技術者だったのだろうか。また武田五一との関係はいかなるもので

写真11　秦泰親・顔写真

あったのだろうか。

まず『沖縄県職員録』をみると、その中には那覇区役所の吏員の一覧もあり、そこでは大正３（1914）年に技手として、はじめて秦泰親の名前が登場する。大正５（1916）年には土木技師と昇任していた。大正８（1919）年の名簿にまで秦泰親の氏名はあるが、その後の名簿には氏名を見出せない。大正９（1920）年の名簿には秦泰親の名はなく、技手として春成才之丞[45]が在籍していた。春成才之丞は大正11（1923）年には建築技師となり、昭和７（1932）年まで技師の職位で在籍していた。ここからは秦泰親が大正８（1919）年から翌９年の間に退職したことがわかる。

秦泰親はその後フランク・ライド・ライトの設計による帝国ホテルの設計スタッフの一員になっていたことが判明している。帝国ホテルの設計は大正８（1919）年から本格的に開始され、その設計陣容[46]が整えられる。その際に帝国ホテル建設事務所に入所したものと考えられる。筆者は武田五一が入所の際に秦泰親を推薦したものと考えている。武田五一は大正５（1916）年に『フランク・ロイド・ライト氏建築図案集』を編纂し、ライトという建築家を日本で紹介するなど親交[47]があった。秦泰親はライトに可愛がられた[48]という。

大正５（1916）年に刊行された『沖縄県人事録』[49]によれば、秦泰親は明治11（1878）年12月に東京府士族として福岡県久留米市に生まれる。父は新撰組にも加わった柔術師範だった篠原泰之進[50]だった。秦泰親は幼少期に東京に移住し、正則中学[51]を卒業後、京都帝国大学理工科大学で修学するとある。明治32（1899）年に宮内省内匠寮に出仕し、次いで諸陵寮に出仕する。明治41（1908）年には農商務省に転勤し、数年後、大津瓦斯会社に工師、さらに泉州瓦斯会社で技師長となる。大正２（1913）年８月には那覇区吏員、そのあとに那覇区技師に就任とある。また大正天皇即位記念として、波上宮の大鳥居の設計、ならびに那覇でのガス施設[52]のために設計をおこなっているさなかにあるという。このような経歴からは建築も手掛ける土木技術者だったことがわかる。

そのことからは、京都帝国大学理工科大学での修学とは、おそらくは土木工学科だったと推測される。同理工科大学は当初土木工学科・機械工学科の２学科からなり、明治30（1897）年９月に発足した。１期生は明治33年７月に卒業している。秦泰親が明治32（1899）年に宮内省内匠寮に出仕していることを考えれば、卒業せずに中退したものと判断できる。実際に土木学科の卒業生名簿[53]に秦泰親という氏名の記載はない。

創設時、土木工学科には４名の教官[54]がおり、そのひとりだった第二講座の助教授．日比忠彦[55]は、のちの大正８（1919）年に京都帝国大学に建築学科をつくる際に、中心的なメンバーとして尽力する。日比は土木工学科内に建築学講座を明治42（1909）年に開いており、この講座が母胎となって建築学科が新設されることになったという背景があった。実際にこの講座は大正９（1920）年に建築学科が設立された時点で、建築学科に移管され、建築学第１講座となる。この講座は土木工学科の時と同様に、日比忠彦が担当することになる。

日比忠彦は土木学科の卒業生ではあったが、建築の構造をも専門として、鉄骨造ならびに鉄筋コンクリート造という新しい構造の積極的な導入者であった。日比忠彦の理論は『鉄筋混凝

写真12　武田五一・顔写真

土構法』（大正２年）をはじめ『鉄筋混擬土の理論及其応用』（大正５年）にまとめられる。またそれ以前の明治39（1906）年から明治43（1910）年にかけて、鉄骨構造についての論文を次々と建築学会の機関誌『建築雑誌』で発表していた。構造設計を担当した実作としては、京都商品陳列館（明治43年）、蹴上浄水場（明治45年）、高島屋京都本店（明治45年）、朝日新聞社屋（大正５年）、京都大学旧建築学教室本館（大正11年）などがある。

次に日比忠彦と武田五一の関係をみる。両者はともに明治30(1897)年に東京帝国大学工科大学を卒業しており、日比忠彦は土木学科、武田五一は造家学科[56]と隣同士の学科だった。日比忠彦は卒業した同年に新設設置される京都帝国大学理工科大学土木工学科の助教授に就任する。武田五一は大学院に進学し、明治32(1899)年に東京帝国大学工科大学建築学科助教授に就任する。その後日比忠彦は明治35（1902）年から２年間、ドイツ・フランスに留学する。武田五一は前年の明治34(1901)年より明治36(1903)年までドイツ・フランス・イギリスに留学しており、時期が重なる。おそらく両者はヨーロッパで会っていた可能性もあるだろう。帰朝後、武田五一は官立京都高等工芸学科図案科教授に就任しており、両者はともに京都に在住することになる。そして武田五一がプランと意匠を、日比忠彦が構造をというように、協同して鉄筋コンクリート造を構造に用いた建造物を次々と立ち上げていた。富山県会議事堂を皮切りに、京都商品陳列館、朝日新聞社屋、京都大学旧建築学教室本館などが挙げられる。ここからは日比忠彦と武田五一がいかに親交が深かったかがうかがえよう。すなわち、武田五一が京都帝国大学工学部建築学科創設に関わることになったのも日比忠彦による推薦[57]だったと考えられる。

このような経緯を考えれば、秦泰親と武田五一の接点に日比忠彦がいたものと判断できる。確証はとれないが、筆者は次のような推測も可能だと考える。秦泰親が那覇区役所の設計に際し、かつての恩師である日比忠彦に設計の相談をし、そこから武田五一に話がつながり、武田五一が紹介されたのではないだろうか。だとすれば、塔屋など鉄筋コンクリート造建造物の構造設計は日比忠彦が担当したものと考えられる。

それ以外に次のようなことも考えられる。大正４（1915）年の夏に武田五一は、当時教授をつとめた官立京都高等工芸学校[58]の夏期休暇を利用して、沖縄を旅行[59]していた。武田五一は明治41（1908）年より大蔵省臨時建築部技師を兼務しており、この時期は一時、その兼務を外れていたが、設計すべき国会議事堂に用いる石材の標本集めを目的とした旅であった。その時の様子は史料的制約のために不明だが、この時の交友関係が設計依頼に繋がった可能性もある。

武田五一の沖縄行きの実相は、次に見る東京帝国大学建築学科教授．伊東忠太[60]の沖縄訪問記『琉球紀行』[61]の記述から類推することができる。大正12（1923）年７月、伊東忠太が逗留した那覇の旅館に県庁役人をはじめ首里市長などの沖縄県の名士や文化人が次々に訪ねてきていた。伊波普猷や県建築技手の本山荘市[62]の名前がある。ここからは、武田五一が沖縄を訪ねた時も、東京帝大教授だった伊東忠太ほどではないにせよ、県の役人をはじめ名士達と会って

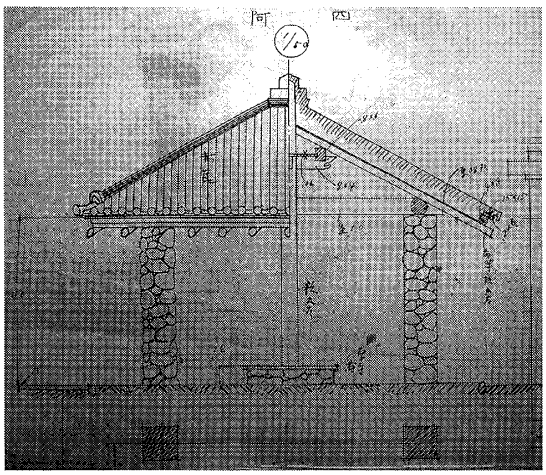

図４　旧松山城展望台の図面

写真13　京都清水小学校塔屋

いたものと考えられる。ちなみに武田五一は大正４（1915）年５月に博士号を取得していた。

『古琉球』を著した伊波普猷は、明治42（1909）年７月に県立図書館建設[63]のための教育事務調査を嘱託され、鹿児島、山口、京都、大阪、奈良へ出張していた。このなかで、京都府立図書館は同じ明治42（1909）年４月に落成しており、この図書館は美術館的な機能も有しており、新築間もない時期にあたり、この建物を見学していたことが判明している。その際に設計者の武田五一と会った可能性もある。ただ、伊波普猷と那覇区役所の接点が見出せないために、前述の日比忠彦との関わりによる設計依頼説の方がより可能性が高いものと考えられる。

ちなみに前述した最初の日本式ならびに第２案目のルネッサンス風の、計２種類の建物の設計は、秦泰親によるものだったと判断できる。

８）建築造形面での影響

設計者の武田五一に注目すれば、昭和一桁代に武田が関わった次の２つの建造物に同種の建築造形をみることができる。

第１は昭和５（1930）年に建設された旧松山城の展望台の四阿（あづまや）[64]である。奈良県大宇陀郡松山町にあったもので、現存しない。その四阿は、赤瓦の方形の形状の屋根と、石が貼られた４本の鉄筋コンクリート造の柱によって支えられる構造になる。石積の形状は沖縄にみられる形態とは異なって、野趣の風情が演出されたものだが、屋根の赤瓦は沖縄のもので、赤瓦に石積という組み合わせは、おそらくは沖縄の風土建築に触発されたものだったと考えられる。

第２は昭和８（1933）年10月に完成した京都市立清水小学校で、階段塔屋の形状が、那覇区役所の玄関廻りの屋根の形状と極似している。そこでは四隅の出隅柱が屋根の軒のラインより上に突き出た形状をとる。設計は京都市営繕課[65]だったが、京都市営繕課の建築技術者たちは武田五一の影響下にあって、このような意匠が現出したものと考えられる。このような建築意匠は竣工当時、「優雅な古典美を巧に表現」[66]と形容されていた。

９）沿革

その所在地は現在、那覇市西消防署がある那覇市東町26番12号の場所だった。戦前期の住所

表示では、上之蔵町の最南端に位置し、戦前までは那覇市最大の繁華街の大門前通りに面していた。その通りは敷地の南から東の方向にあり、それに直交して敷地の南から西の方向に通りがあり、交差した地点に市役所の玄関が設けられていた。

この敷地は琉球王国時代に天使館が建っていた場所にあたる。天使館とは中国からの冊封使の迎賓館であり、この建物を拠点に「正副使以下六七百人が約半年間も那覇に滞在」[67]する習わしだった。天使館の創建は16世紀初頭といわれ、近世期にその建築スタイルは「中国風」であったことが知られている。冊封使が滞在する半年間は「那覇の市中は頗る唐臭く」なったという。この一画は琉球王国時代には顔見世や那覇里主所、下天妃宮などが建ち並ぶ界隈であって、1609年の薩摩侵入以降は那覇の行政の中心地になっていた。そのような意味でこの地は近世には、那覇でもっとも重要な場所になっていたことが窺える。

最初の那覇区役所はこの天使館の跡地に建てられたもので、おそらくは明治29（1896）年に旧区制が施行され、その際に建設されたものと考えられる。この建物についてはどういう建物であったのか詳細は史料的制約もあって定かではないが、大正５（1916）年の『沖縄県治要覧』[68]に掲載された外観写真によれば、赤瓦葺、寄棟屋根という伝統的な建築スタイルによるものであったことが読み取れる。また建物は平屋建で、道路との間には塀が設けられ、門柱は煉瓦積であることがわかる。その建物の平面形状はコの字型もしくはＬ字型だったものと推測できる。写真から窺えることは、正面に玄関がある様子であり、その部分には玄関用の屋根が設けられていた。

那覇区役所の前身にあたるのが、明治13（1880）年６月に設置された那覇役所[69]だった。沖縄県下の各地方の行政区画の決定を受け、設けられたものだったが、その前年の明治12(1879)年４月には那覇四町・久米・泊の行政を担うべく顔見世役所[70]が旧那覇里主館に設けられており、この組織が改称したものだった。里主館とは琉球王国時代の役所のことを示し、里主所ともいった。那覇里主館は1638年に設置されていた。下天妃宮の東隣の位置にあり、天使館とは少し離れていた。すなわち、那覇区役所設置までの間に、敷地は旧里主館から天使館跡地に移っていたものと考えられる。

２節．区議事堂（公会堂）

区役所と同時に完成するのが、議事堂兼公会堂だった。沖縄の風土に対する一定の配慮があった区役所庁舎とは、異なって、議事堂建築はルネッサンスを基調とした建築になっていた点に特徴がある。外観写真以外に詳しい資料はなく、以下、写真の分析である。

その建築内容をみると、木造２階建で玄関にはポルティコが取り付き、正面には三角形の妻部をみせる。正面は下見板貼ながらも、側面は軒蛇腹の形状から塗り仕上げにみえる。屋根は瓦葺きで、寄棟を基調としつつ、正面玄関側に破風をみせる切妻屋根が覆い被さる形状となる。棟端には飾り物が取り付く。開口部の形状をみれば、２階の中央には縦長窓があって、三角形のペディメントを見せる。その左右にアーチ形状の窓が２連並び、さらにその端部には左右ともに正面方向に建物が少し翼部状に張り出す。その突出した翼部の上部には寄棟状に屋根が廻る形式となり、妻部が立ち上がった中央部をより強調する手法が採られていた。大正７（1918）

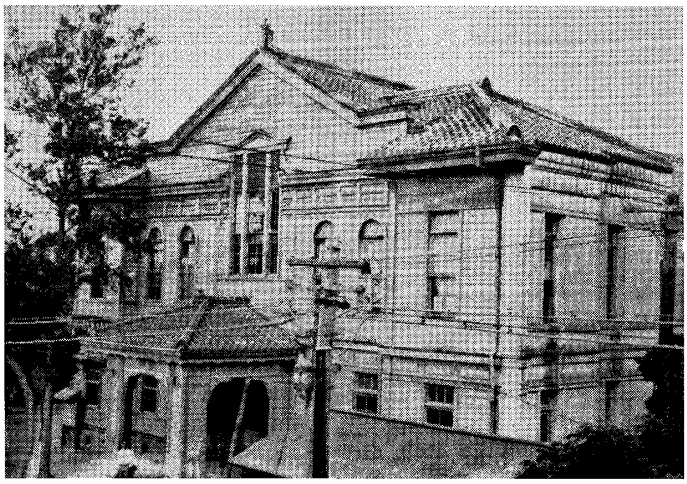

写真14　那覇市公会堂

年２月３日の『琉球新報』によると、主任技師以外に顧問技師に報酬200円を支払っていることからは、武田五一が設計に関わっていた可能性も考えられるが、詳しくは分からない。

３章．学校と教会の建築

１節．県立工業徒弟学校

区役所庁舎以外に沖縄独特の風土を考慮した建築は、同時期に現れていたのだろうか。実は昭和になると鉄筋コンクリート造という近代的な構造や意匠のものに、屋根が付けられる事例は、沖縄県下の県立学校や各村立の小学校校舎でみられた。このことは他府県では見られない現象であった。その前段階として、木造洋館の校舎の屋根に本県産の赤瓦が葺かれる事例があった。県立工業徒弟学校校舎である。

大正７（1918）年３月６日の『琉球新報』の記事によれば、「外観は独逸近世式を範り、色

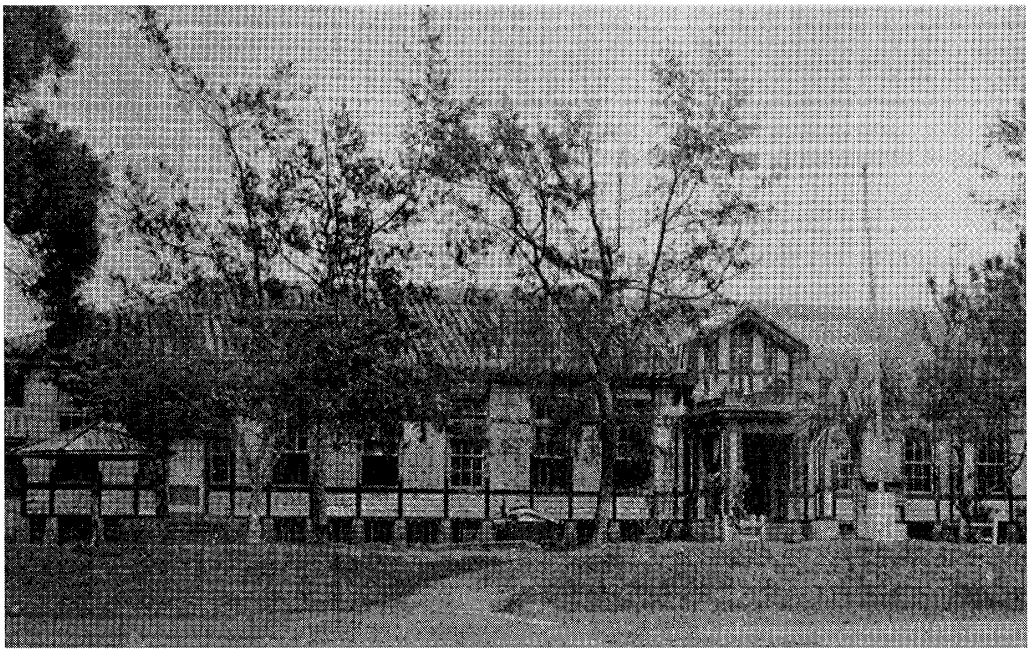

写真15　県立工業徒弟学校

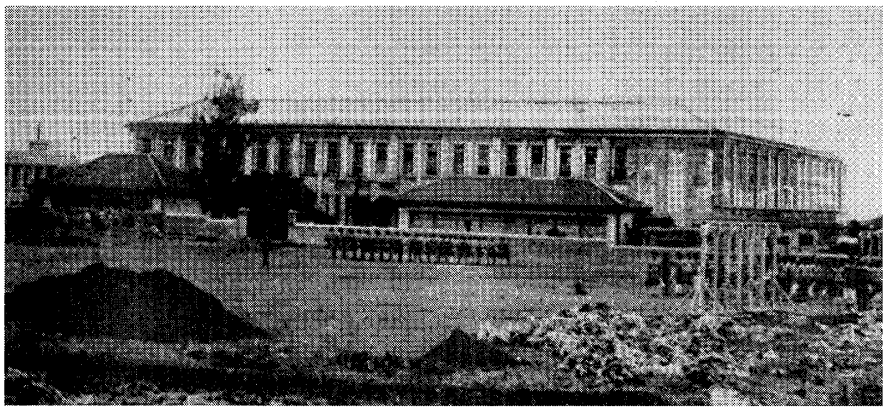

写真16　県立第一中学校

合は屋根（本県産赤瓦）に適合する色彩を施し」とある。琉球家屋に用いられる赤瓦が、ここでは洋風建築にふさわしいものと考えられていた。このことは昭和５（1931）年の県立第一中学校や昭和３（1928）年の県立第三中学校の屋根が瓦になることと共通する。

この校舎は建坪が400坪あって、平屋建で、屋根は寄棟となる。国頭農学校をはじめ、中頭、島尻の３つの農学校校舎の木材が転用されていた。材料及敷地代を除く、工事費だけに12.481円がかかった。大正６（1917）年４月８日に起工し、同年12月25日に完成する。

実際にはどのような外観の建物だったのだろうか。柱や梁を外部に表出するハーフティンバー風の外壁を有し、玄関ポルティコがあり、その上部に妻面を高く掲げ、中心性を強調する手法が用いられていた。

設計は県庁の建築技手の樋口敏彦[71]だった。『大典記念沖縄県人事興信録』[72]によれば、樋口敏彦は明治21（1888）年に生まれ、明治41（1908）年に沖縄県立第１中学校を卒業後、東京高等工業学校[73]建築科に進学し、明治45（1912）年に卒業した建築技術者だった。樋口敏彦は父の代に福岡県から渡ってきていた。樋口敏彦は大正５（1916）年より大正９（1920）年までの５年間、沖縄県庁土木課に在職していた。沖縄県庁の建物も樋口敏彦が設計を担当した。

ではなぜ、赤瓦が選ばれたのか。風致に恵まれたかっての琉球王国の首都．首里市に位置したことが関係するのではないかと、筆者は考える。沖縄県の明治以降のいわゆる「近代学校」の設置は首里市の旧城ならびその周囲に集中していた。この学校は明治35（1902）年に首里区立工業徒弟学校として、首里王城に隣接する旧小禄殿の建物を利活用して開校する。その後首里城内の書院に移り、大正３（1914）年に県立工業徒弟学校となり、改築された。

けれども木造建築ゆえに「二十四年ノ長年月ヲ経過シ　其ノ間本県特有ノ白蟻ノ被害ト周期的ニ襲来セル暴風雨ノ被害ヲ蒙レル爲　全般的ニ校舎ノ腐朽甚シク早急ニ改築ノ必要ニ迫ラレ」[74]という状況だった。最後は空襲で焼失した。

２節．那覇バプティスト教会

建築の洋風化の過程で欠かせない建築類型に、キリスト教会がある。沖縄県下においてはメソジスト派が明治20（1887）年に宣教を開始し、次いで明治24（1891）年にバプテスト派が琉球伝道を開始する。明治末期の沖縄ではキリスト教が盛んになり、そのような機運のなかで大

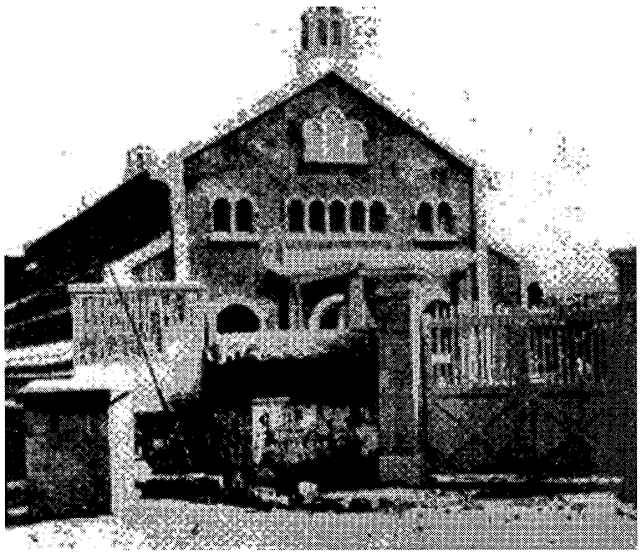

写真17　沖縄バプティスト教会

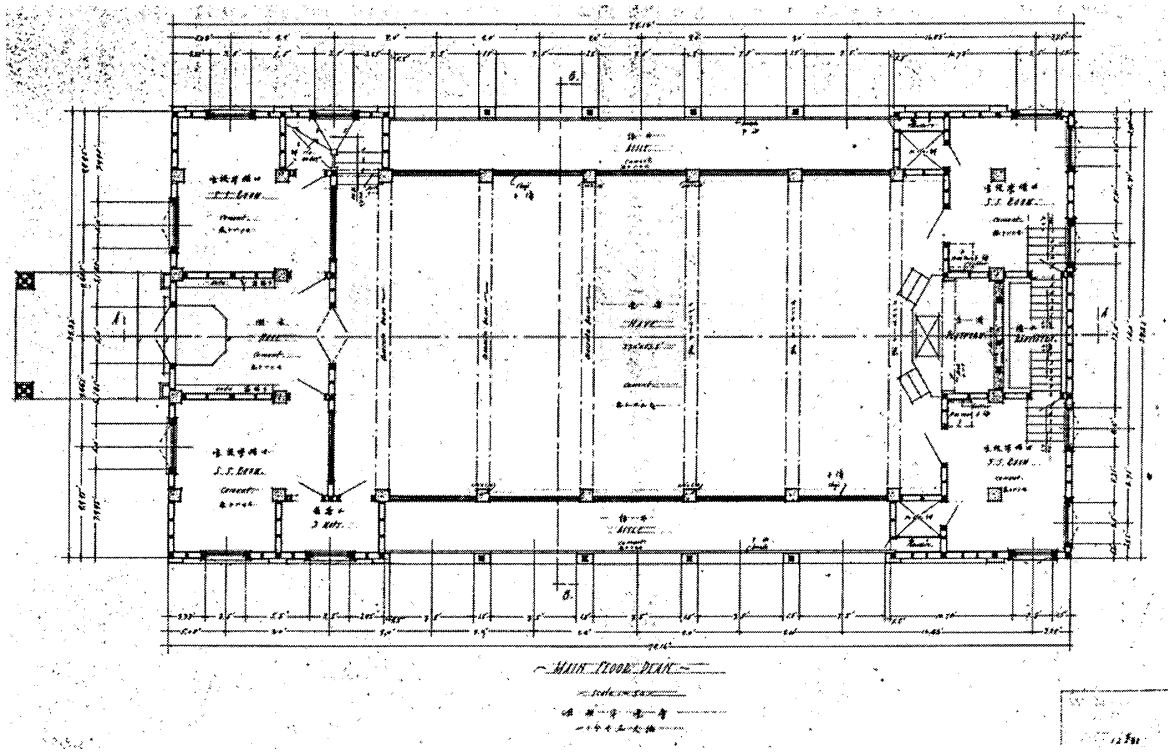

図５　沖縄バプティスト教会図面　１．平面図

正５（1916）年に、沖縄で最初の本格的建築の教会堂が建設されることになる。

それが大正６（1917）年９月に竣工した那覇バプティスト教会だった。設計者は来日して12年目の建築家．ヴォーリズだった。牧師は明治34（1901）年に来島して以来ずっと伝道してきた原口精一がつとめていた。竣工直前の新聞記事[75]によると、「西洋造りに琉球風を加味せる風変わりの建物」とある。この「琉球風」が建築的に何を示しているのかはわからないが、会堂の側廊の外側に、両側ともに吹き放ちの歩廊、すなわちアーケードがつくられていた。そこは８連のアーチの開口部からなる。湿気が多く、風を通す必要がある沖縄ならではの工夫とも

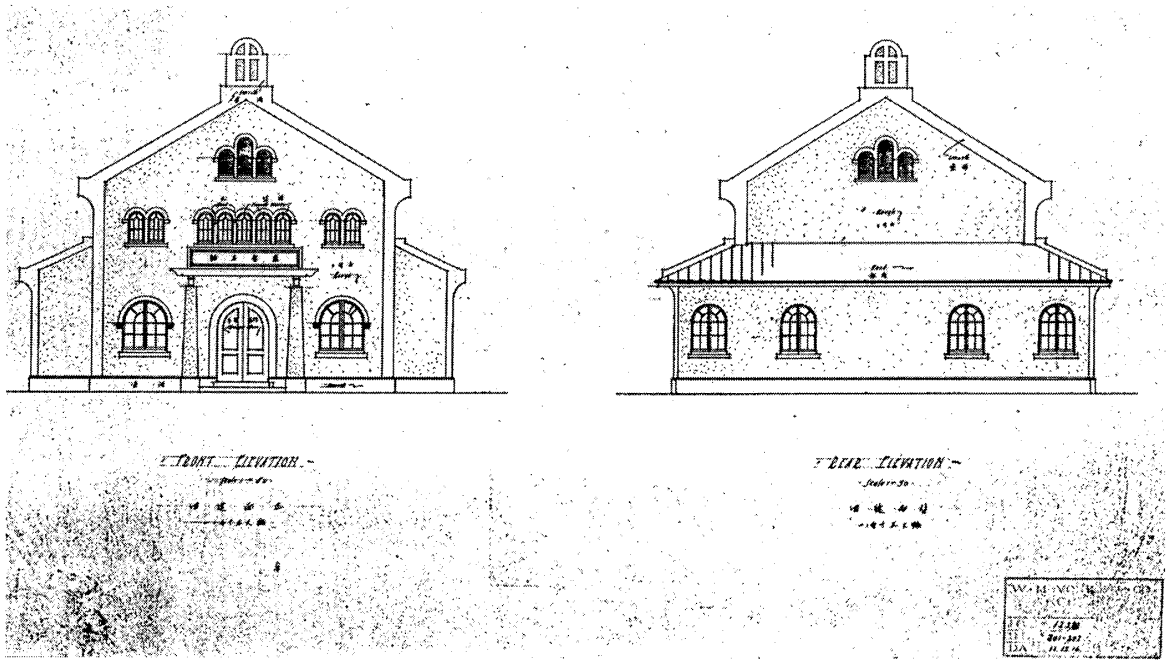

図５　沖縄バプティスト教会図面　２．立面（正、背）

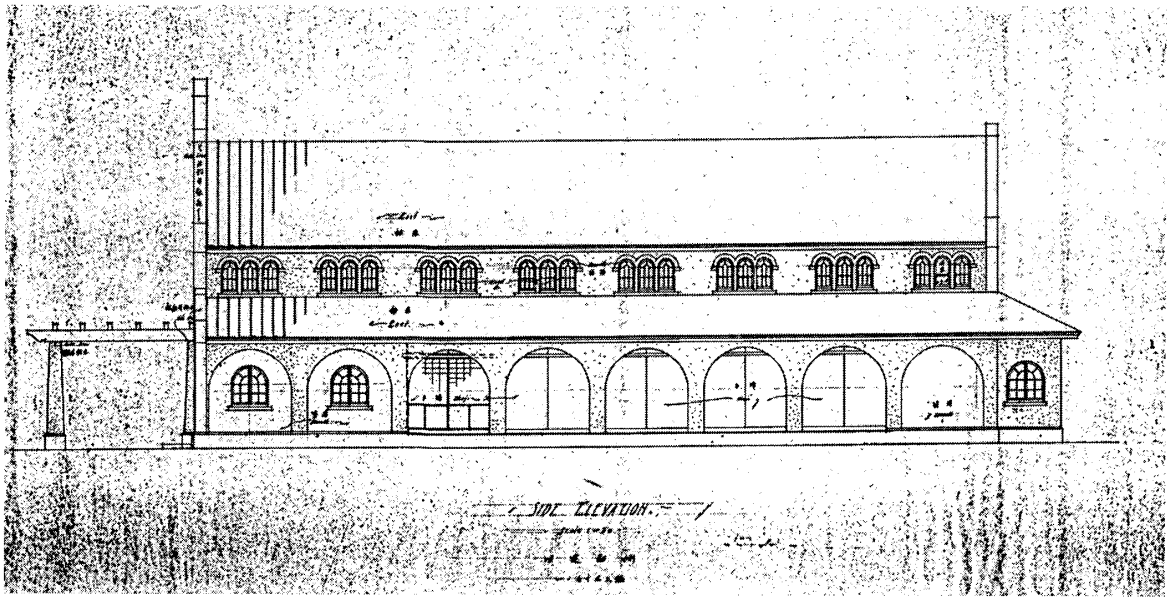

図５　沖縄バプティスト教会図面　３．立面（側）

思える。このことを指していた可能性もある。また玄関入口部分は柱と梁がパーゴラ風に組み合わされており、ここに「琉球風」という意匠の意味を込めたのかもしれない。

外観をみると、妻面側をファサードとしたもので、一階はアーチが三連、二階は中央に五連のアーチが、その両横に二連のアーチ、小屋組換気に三連の鎧戸アーチがあり、棟端に十字架を縁取った飾りがつく。正面壁の出隅部分は平滑な左官仕上げがおこなわれ、縁取りがされる。一方内側の壁面はドイツ壁風の凸凹の付いた粗い仕上げとなっていた。このように外壁仕上げを変えることで、デザインがなされていた。同種の意匠は大正２（1913）年にヴォーリズが京都の兄弟 YMCA 会館[76]でもみることができる。この建物の躯体は煉瓦造となり、階数は一部２

階があるという構造であった。屋根は赤瓦が葺かれていた可能性がある。このことが前述の「琉球風」の意味だったのかもしれない。小屋組が記された図面などの史料に欠けるために、どのような屋根構造かは定かではないが、木造トラスだったと推測される。

この建築は戦災で瓦解したが、設計図の一部が残っており、それらは平面図、正面図・背面図・側面図からなる。平面図からは間口が39.32尺（11.91メートル）、奥行が79.16尺（23.96メートル）となる。教会堂は500人収容されるものだった。さらに平面図を熟視すると、奥行方向には柱が9.0尺（2.73メートル）スパンで配列されていることに気がつく。柱は1.5尺（45.5センチメートル）角の大きさの煉瓦の独立柱からなる。工費は12,000円とあり、幼稚園も併設されていた。

大正６年８月18日の『琉球新報』によれば、「昨年の７月に本教会堂の設計者としてヴォリストと云う米国の建築家が来県して、本県の色々の建築物に就て調査を試みましたが、木造物は大方白蟻が発生しているのを発見したので、木造は危険であると云う事から中止し、設計を変更し西洋造りと琉球造りの長所を採って、琉洋折衷と云うような形になったのです」

実際には煉瓦造の建築であったが、ここからは沖縄県の気候や風土を考慮した建築が目指されていたことが判る。

この場所については、歴史家の石川政秀による次のような言[77]がある。

「一九三一（昭和六）、日本基督那覇教会は久米町の内兼久山に教会堂を建設したが、石造りの様式構造で当時久米町にバプテスト教会、メソジスト中央教会の三つの教会堂が集中したことは、長く琉球王国の教学の中心地と見られた土地だけに不思議な神の摂理と言うほかはない」

４章．赤瓦葺の意味

１節．家屋制限廃止と赤瓦葺の成立

２章、３章でみてきた「沖縄」という風土を意識した建築をどう捉えればいいのだろうか。いずれもが共通して、屋根が赤瓦葺になっていた。赤瓦とは琉球王国時代に沖縄に成立した屋根素材ではあるが、上流階級の邸宅のほかに那覇の商家のみが許されたものであり、一般の住宅で自由に用いられるようになるのは、明治22（1889）年の家屋制限[78]の廃止以降である。一見赤瓦葺とは伝統的なものと考えられているが、那覇を除けば、明治中期以降に誕生したものがほとんどを占める。同時にもっとも「いいもの」、すなわちステイタス・シンボルという認識が赤瓦葺にはこの時期に形成されており、そのこともあって家屋制限廃止以降、きわめて短期間に普及したのだろう。

赤瓦葺は外観面に表れ出た美観的な側面にくわえて、耐風と耐水という沖縄県特有の風土に対して必要な二大機能を有していた。建築学者．田邊泰[79]は『琉球建築』[80]のなかで、「耐風的の考案は、建築に於いて屋根は何れも重厚なる赤瓦で、然も瓦の羽重ねの部分は、珊瑚礁を焼いて作った石灰の白漆喰で塗られてゐるのである。要するに風速の早い暴風雨の際に於ける屋根の破壊並に雨水の逆流を防ぐ爲めである」と記述している。

このような認識があったからこそ、設計時に「琉球」らしさが意識された際に、近代建築の

写真18　明治39年の那覇市街

なかにも積極的に赤瓦葺の手法が摂取されることになったものとみることができる。

2節．赤瓦葺の認識と設計理念

すでに考察した那覇区役所、県立工業徒弟学校、那覇バプティスト教会の3建築は、大正6（1917）年に着工もしくは竣工という共通点がある。大正6（1917）年という時期で、沖縄の赤瓦葺はどのように捉えられていたのだろうか。

大正6（1917）年までの言説をみると、次のようなものがある。明治27（1894）年の笹森儀助による『南島探検』[81]を嚆矢として、明治39（1906）年の加藤三吾による『琉球之研究』[82]、同年の脇水鉄五郎による「沖縄視察談」『地学雑誌』[83]が確認される。

笹森儀助によると、「沖縄群島ハ総テ家屋ニ制限アリ如何ナル富農ト雖モ家屋瓦葺ヲ禁ス近年此制ヲ解クモ官舎ノ外一モ瓦葺ヲ見ルコトナシ」とある。加藤三吾によれば、まず家屋全般については、「沖縄の家屋は一般に平たい構造で、石垣を高く繞らし、屋根は厚い赤瓦を漆喰で上部に葺き固めてをるから、大抵の暴風にも安全である」とあり、赤瓦についてみれば、「旧来家屋の構造に厳重な制限があつて、二階屋は決してつくらぬことにしてあったもので、屋根を瓦葺にすることもむかしは首里那覇に限られ、田舎では間切番所を除いては、すべて茅葺屋に定まってをつた。しかし、近頃は此等の禁制もないので、小学校、砂糖小屋、などの瓦屋が逐々田舎に見えるやうになつた」とあり、家屋制限廃止以降十数年間に瞬く間に普及したことがわかる。加藤三吾の妻．加藤順子は「思ひ出」[84]と称して次のように記した。「汽船が那覇港に着きまして、先づ眼を驚かしました事は、眼前に展開する変わった家屋の有り様で、屋根の瓦は赤く、それを真白なシックイでおさへてある事は中々美観で、丁度お伽噺の竜宮城をおもはせました」とある。

暗灰色の瓦屋根に慣れた他府県の人の眼には、いままでに見たことのない色彩ということで、ある種のカルチャーショックを受けていたようだ。ただそれはマイナスに作用したもので

はなく、それまでに見たことのない新しい景観との出会いであり、いわば発見だった。

設計者の武田五一、ヴォーリズ、樋口敏彦の３人が沖縄建築にどのようなイメージを持っていたのかは、史料的な制約もあって判明しないが、那覇区役所を設計した武田五一は沖縄について、「天然の抱負なる生産物と其穏和なる気候の爲めに、一種の楽土をなして居る」[85]とし、「此石灰は純白色でなく多少黄味を帯びて居るから、瓦の赭(しゃ)色とよく調和し、一種の暖国的の階調をなして居る。之に琉球特異なる植物の深緑色が映りはへて、夢見る如き雰囲気を構成するのである」[86]と、昭和４（1929）年にその印象を記した。

沖縄で育った沖縄県役人の樋口敏彦を除いては、沖縄の気候風土を詳しく知っていたものとは思えない。武田五一とヴォーリズは設計の際に沖縄を訪問したものの、一月単位で逗留した訳ではなかった。一流の建築家としての観察眼はあったとしても、ある意味で「沖縄」をイメージとして捉え、設計したのではなかったのかと思われる。

そのようなまなざしは昭和10年代前半に沖縄をしはしば訪れた、民芸運動の指導者だった柳宗悦の次の記述にうかがえる。「建物の殆ど全てはあの豊かな昔ながらの赤瓦を用いているのです。全体としてかくも統一ある都市の例はもはや内地では見ることが出来ませぬ。見慣れている土地の人々には驚きでなくとも、我々の眼には夢の如き場面なのです」[87]と絶賛している。その翌年昭和15（1940）年には次のように記していた。「其の首都ばかりではない。何処にも美しき場面に出逢う。建築の形相、特に屋根の美観に至っては、将に日本随一である」[88]

結

１）これまでは解明されることのなかった明治大正昭和戦前期の沖縄県下に建設された公共建築の全体的な流れについて解明ができた。明治前期に和風建築が、明治後期にはヨーロッパの歴史様式の影響を受けた建築が導入された。

２）那覇区役所が沖縄県でもっとも早い鉄筋コンクリート造建造物であり、かつわが国最初のスパニッシュ・ミッションの建築であることを指摘し、その建設経緯や建築内容、建設体制を解明し、当間重慎区長の都市政策の一環で誕生したことを明らかにした。

３）大正期に入ると、那覇区役所や那覇バプテスト教会、県立工業徒弟学校などにみられるように、沖縄という風土に考慮した「琉洋折衷」とよばれた洋風建築が誕生していたことを見出した。その表れが沖縄に伝統的な赤瓦屋根の採用だった。

４）設計者については、武田五一やヴォーリズなど関西を拠点に建築活動をおこなった建築家の関与を発掘する一方で、那覇区土木技師．秦泰親や沖縄県土木課建築技手，樋口敏彦といった自治体内部の営繕組織を担った建築技術者の様態を解明した。

５）沖縄建築の大きな特徴である赤瓦葺の意味を歴史的に解明し、それが単に造形美だけではなく、耐風や耐水という沖縄特有の風土に対抗するために生まれたことを論じた。また明治中期より昭和戦前期までに沖縄を訪れた知識人が、赤瓦葺建造物についていかなる認識を有していたのかを整理し、本稿で取り上げた３つの建築の設計者の理念との関係を考察した。

表1　写真と図の出典一覧

番号	題	出典
写真1	明治期の県庁舎	『沖縄県治要覧』沖縄県．1916
写真2	大正期の県庁舎	『那覇百年のあゆみ』1980
写真3	大正期の県議事堂	『那覇百年のあゆみ』1980
写真4	那覇区役所竣工	『建築世界』第14巻1号．1920
写真5	焼け残った塔	『那覇百年のあゆみ』1980
写真6	当間重慎・顔写真	『沖縄県人事録』1916
写真7	旧那覇区役所	『沖縄県治要覧』沖縄県．1916
写真8	那覇区役所塔	『沖縄県治要覧』沖縄県．1916
写真9	大門前通と区役所塔	『那覇百年のあゆみ』1980
写真10	マントヴァの広場	筆者撮影
写真11	秦泰親．顔写真	『沖縄県人事録』1916
写真12	武田五一．顔写真	『武田五一作品集』1933
写真13	京都清水小学校塔屋	筆者撮影
写真14	那覇市公会堂	『沖縄県治要覧』沖縄県．1921
写真15	県立工業徒弟学校	沖縄県立沖縄工業高等学校所蔵
写真16	県立第一中学校	『那覇百年のあゆみ』1980
写真17	那覇バプティスト教会	『那覇百年のあゆみ』1980
写真18	明治39年の那覇市街	「沖縄視察談」『地学雑誌』第18号10巻・11巻・12巻．1906
図1	那覇市街地図	
図2	区役所の位置図	
図3	天使館配置図	
図4	旧松山城展望台の図面	岩崎弘氏所蔵
図5	那覇バプティスト教会図面	一粒社ヴォーリズ建築事務所・大阪芸術大学

謝辞：郷土史家の島袋文雄氏、沖縄大学元教授の石川政秀氏、沖縄県立沖縄工業高等学校同窓会事務局の宮城信昌氏、沖縄県立図書館の天久美鈴氏、那覇歴史資料館の宮城氏、冬夏社の山川氏、石田忠範、岩崎弘、の各位には御世話になった。紙面を借りて謝意を表します。

注

1　村松貞次郎「総論」『近代日本建築学発達史』日本建築学会編．丸善．1972、をはじめ、藤森照信『日本の近代建築（上）』岩波書店．1993、などを参照。

2　『琉球新報』昭和7年5月21日「建築請負の長老／井上久吉翁談」。井上によると、明治10年代に施工を担った税関所が「最初の洋館建て」という。

3　「琉球見聞雑記」『沖縄県史』第14巻資料編4．琉球政府文教局編．1965

4　瓦葺は特権階級にしか許されなかった建築だった。

5　明治27（1894）年に那覇で開催された九州沖縄連合共進会のために建設された南陽館であった。残念なことに写真や図面などの史料に欠けるために詳細は掴めないが、木造ながらも「堂々たる洋館建て」であったと伝えられている。

6　新里金福・大城立裕『近代沖縄の人びと』太平出版社．1972

7　国民教育社から昭和7年に刊行される。

8　明治大正昭和戦前期に月刊で刊行されていた建築系の専門雑誌で、もっとも長く刊行が続いた。また会員頒布用ではなく、広く一般を対象とした。東京の建築世界社が発行した。
9　竣工記念写真帖などの史料、当時の新聞記事は現時点で見出せていない。
10　『那覇百年のあゆみ』那覇市企画部市史編集室．1980
11　1933年に、京都帝国大学工学部建築学教室内に置かれた武田博士還暦記念事業会によって刊行されている。
12　竣工記念写真帖などの史料、当時の新聞記事は現時点で見出せていない。
13　清村勉が設計。現在、沖縄県指定有形文化財
14　西川龍也「武田五一による福山市庁舎・市議会議事堂について」『フランク・ロイド・ライトと武田五一』ふくやま美術館．2007
15　庁舎正面大玄関とは塔のことを指しているものと判断できる。
16　『日本科学技術史大系・第17巻建築技術』第一法規出版．1964
17　前掲６）と同じ。
18　前掲６）と同じ。
19　『当間重剛回想録』当間重剛回想録刊行会．1969
20　『那覇市史・通史篇第２巻近代史』那覇市役所．1974
21　前掲20）と同じ。
22　隣接した場所で、大阪市中央公会堂は大正７年、大阪市役所は大正10年に完成する。
23　『琉球新報』による。大正７年４月30日「那覇市制施行」
24　『琉球新報』による。大正５年12月26日「那覇区協議会／区役所移転問題」
25　「那覇役所設計改正」『琉球新報』大正６年６月30日
26　『琉球新報』
27　本瓦葺の一種だが、丸瓦全体を先細りとして半円錐状となし重ねていく。
28　丸山もとこ「スパニッシュ・スタイルの邸宅」『阪神間モダニズム』淡交社，1997
29　「パナマ太平洋万国博覧会所見」『建築雑誌』第342号．1915
30　川島智生「神戸女学院学舎の建築史学（１）―計画されたキャンパス―」『論集』第51巻第１号．神戸女学院大学．2004
31　那覇在住の郷土史家．島袋文雄氏による証言
32　「那覇役所設計改正」『琉球新報』大正６年６月30日
33　町角にあって、道いく人の視線を引きつける建造物で、一般に背の高い建物が該当する。
34　20世紀を代表する椅子のデザイナーとして著名。
35　フレッチャー『フレッチャー建築史』岩波書店．1919
36　建物に接続して設けられた鐘楼以外に、鐘楼の中で鐘を吊る最上階という意味もあるが、ここでは前者を指す。
37　1250年に建設。
38　前掲154）と同じ。
39　郷土史家．島袋文雄氏による証言。小学校６年生の時の記憶による。
40　現存する。観光地のひとつになる。
41　「川崎別邸」『かはさき画報』第４巻37号．1916
42　帝国大学工科大学造家科を明治26年に卒業した建築家で、東京・大阪に建築事務所を経営する。作品に東京市の一連の小学校や奉天領事館、大阪石原時計店などがある。
43　『武田五一作品集』武田博士還暦記念事業会1933
44　新撰組の篠原泰之進の長男で、小説家の子母澤寛と親しかった。
45　鹿児島県出身で、早稲田工手学建築科を大正９年７月に卒業していた。
46　明石信道『旧帝国ホテルの実証的研究』東光堂書店．1972、に、秦泰親の名前はない。
47　川島智生「東本願寺の西洋館」『近畿文化』第693号．近畿日本鉄道資料室．2007
48　秦泰親と親交の深かった小説家．子母澤寛による証言。『新撰組始末記』万里閣．1928

49 大正５年11月20日に沖縄県那覇区にあった沖縄県人事録編纂所から発行、編纂兼発行者は楢原友満。
50 明治維新後は、秦林親に改名する。司馬遼太郎の小説『新撰組血風録』や子母澤寛の新撰組３部作に登場する。
51 現在の私立学校．正則高等学校で、1889年（明治22年）に設立される。明治期は進学校として有名だった。
52 前掲６）と同じ。
53 京大土木学科同窓会の「京都土木会」の発行。
54 『京都帝国大学一覧』京都帝国大学．1898
55 藤井肇男『土木人物事典』アテネ書房．2004
56 この年、従来の造家学科は建築学科へ学科名が改称される。
57 『京都大学工学部建築学教室六十年史』京都大学工学部建築学教室創立六十周年記念事業会．1980
58 現在の国立京都工芸繊維大学工芸学部
59 武田五一「琉球トラバーチン宇流間石に就て」『建築と社会』昭和４年12月号．建築協会．1929
60 わが国最初の建築史家で、法隆寺の再発見者として名高い。首里城の価値付を見出し修復の指導をおこなった。
61 大正14年に「科学知識誌」に掲載したものが、昭和11年に『見学紀行』として龍吟社から刊行。『伊東忠太建築文献』の第五巻にあたる。
62 大正13年以来沖縄県建築技師。学校を出ずに叩き上げで建築ならびに土木の技術者となる。本籍は鹿児島県。出典は『大典記念沖縄県人事興信録』大典記念沖縄県人事興信編纂所．1929年による。
63 鹿野政直『沖縄の淵』岩波書店．1993
64 武田五一の弟子の岩崎平太郎が武田五一の指導の下に、設計をおこなう。
65 担当は八戸高峰（早稲田大昭和３年卒）だったことが、筆者の遺族への聞き取り調査で判明している。詳細については川島智生「大正・昭和戦前期の京都市における鉄筋コンクリート造小学校建築の成立とその特徴について―大正12年から昭和９年までの期間―」『日本建築学会計画系論文集』508．1998、を参照
66 「京都東山々麓に全国一の近代校舎」『土木建築之日本』第８巻第11号．土木建築之日本社．1933
67 『那覇今昔の焦点』沖縄文教出版社．1971
68 沖縄県が1916年に発行
69 前掲20）と同じ
70 神田清輝『沖縄郷土歴史読本』琉球文教図書．1968
71 『琉球新報』による。
72 大典記念沖縄県人事興信編纂所．1929年による。
73 現在の東京工業大学
74 仲間慧「旧沖縄県立工業学校移転改築設置計画書」『建学の源流をよみといて沖縄県立工業高等学校の校跡を振り返る』創立100周年記念別冊．沖縄県立工業高等学校．2002
75 『琉球新報』による。大正６年８月18日「琉洋折衷の新教会堂／沖縄浸礼教会」
76 現存する。国の登録文化座手に登録。
77 『沖縄キリスト教史』いのちのことば社．1994
78 1737年王府が発した「大御支配方申渡条々」は屋敷・家屋の規模を制限し、平民の瓦葺をも禁止した。
79 早稲田大学建築学科を大正13年に卒業し、早稲田大学建築史担当教授をつとめた。伊東忠太に師事する。
80 昭和12年に座右寶刊行会から発行される。巌谷不二雄との共著。巌谷は相模書房を設立する。
81 笹森儀助みずからが発行人を兼ねた。
82 加藤三吾が長崎県平戸にいた時に自費で刊行し、昭和16年に文一路社から早川孝太郎の校正によって再刊される。
83 第18号10巻・11巻・12巻．に掲載
84 前掲82）で記した昭和16年の刊行本に掲載される。

85 「沖縄の民家（上）」『建築と社会』日本建築協会．第12輯７巻．1929
86 「沖縄の民家（下）」『建築と社会』日本建築協会．第12輯12巻．1929
87 「琉球の富」『柳宗悦全集第15巻沖縄の伝統』筑摩書房．1981
88 『月刊民芸』第２巻３号．日本民芸協会．1940

（原稿受理　2007年11月１日）